

イハナシ

〔倭訓栞後編二〕いはなし 方丈記に見へたり、小草也、夏月子を結ぶ、色赤く食ふべし、一名いはせ。山枇杷也といへり、山中岩ある所に生ず、備前に磐梨郡あり、北國にては砂いちごとといふとぞ、梨品にも石梨あり、肉堅く食べからず。

〔和漢三才圖會九十二本〕伊波奈之

按伊波奈之、江州三井寺山中有之、苗高二三寸、葉大如瓢、樹葉而不尖、搗地生、二月開小白花、似虎耳草花、三月結子如青大豆、而圓數顆、攢生如楊梅、裹於葉交、外色青、內紫黑色、小兒剝皮食、味微酸甘。〔方丈記〕小童あり、時々來て相訪ふ、もしつれなる時は、是を友としてあそびありく、かれは十六歳、われは六十、其齡事の外なれど、心を慰る事はこれ同じ、或はつばなをぬき、岩なしをとる、又ぬかごをもち、芹をつむ。

紫金牛
百兩金

〔書言字考節用集六〕平地木、高五六寸、而有小紅

〔倭訓栞前編三十四〕やまたちばな 延喜式大嘗祭に山橋子と見えたり、俗に藪柑子といふ是也

と、古今榮雅抄に見えて、山すげにそへて、卵槌髪そぎの時に用る物也、萬葉集に草なるを、清少納言は木とせり、新六帖に、ふりにける卯月のけふの髪そぎは、やまたちばなのいろもかはらず。

〔玄同放言二〕山牡丹山橋附出

堯憲深秘抄に、山橋ハ牡丹也といへり、是よりして後、萬葉集に牡丹の歌ありといふものさへあるはこゝろえがたし。

萬葉集 第四 足引之山橋乃色丹出而、語言繼而相事毛將有、

春日王

同第十九 此雪之消遺時爾去來歸奈山橋之實光毛將見、

大伴家持

同第二十 氣能己里乃由伎爾安倍氏流安之比奇之夜麻多和波奈乎通刀爾通彌許奈、

けのこりは頃日也、雪にあへては萬葉略解下に相照也といへり、つとにつみこなは家裏に摘